

やはり俺の青春スポコンは間違っている

鉄瓶28号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

修学旅行の楽しい楽しい思い出もそこに、奉仕部の今後について呼び出された比企谷八幡。

暴力制裁を回避するために咄嗟についた嘘が、彼の間違えてしまったラブコメを更に間違えたものへと変化させる…！

ベイビーステップとのクロスオーバー作品です。更新はかなり遅いと思います。なるべくテニス用語には解説を入れていくのでテニス初心者の方でも読みやすくしていけたらなと思っています。

目次

彼は新たな人生を歩き出す	1
彼の嘘は真実となる	4
彼は庭球における回転の基本を知る	6
彼にとって仲間とは何か考える	9
比企谷八幡は自分で居場所を壊し続ける	11
彼女らは決意し、彼はまた悩む	13
比企谷八幡は背中を押され、また歩み始める。	18
平塚静は彼らの前に立ち塞がる	21
彼らは一つ、大きな舞台へと踏み出す。	30
彼に「足りないもの」を見つけてるために、強大な敵にも立ち上がる。	33

彼は新たな人生を歩き出す

「比企谷、お前これからどうするつもりだ？」

平塚先生に職員室へ呼ばれた俺は、着くなりこんなことを聞かれた。

季節は秋の終わり、楽しい楽しい修学旅行から帰ってきて一週間たったある日のことである。平塚先生の授業を寝たとかどうとかで呼び出されたが、内容は全く関係ないものであった。タバコに火をつけ煙を俺に吹きかける彼女に俺はとぼけてみせる。

「これから…といますと」

「お前、最近奉仕部に足を運んでいないだろう」

うぐつ、バレていたか。まあ何となく予想はしていたが。

修学旅行でおこなった嘘告白の一件から何となくあの部室に行きづらくなっていたのだ。

いや、部室だけじゃない。あの二人、雪ノ下、由比ヶ浜とも顔を合わせていない。

「…修学旅行か」

「さあ、なんの話でしょうかね」

「はあ…」

溜息をつく彼女を不意に可愛いと思ってしまったが灰皿に積もった短いタバコが目につく。この人職員室で吸ってるの？てかこんなに吸ってるけどこの人大丈夫なの？肺年齢はアラサーすら超えているんじゃない？早く誰か貰ってやれよ。八幡とっても心配。

「おい、お前失礼なことを考えているな」

「メツソウウコモゴザイマセン」

「あのなあ、比企谷…」

また一つ大きな溜息をつき、灰皿にタバコを押し付けた彼女は真っ直ぐ俺の目を見つめてくる。その目は真剣だった。

「私は奉仕部の顧問として、このような問題は放っておけない。分かるか？」

「はあ…」

「そこでだ比企谷…」

今度はその目に悪戯心のようなものが見える。あれ、この先嫌な展開しか待ってないような気がするんだけど…

「5秒やる。その間に奉仕部に戻るか、戻らないか選べ」

「もし戻らなかつたら?」

「この右手がお前の顔を捉えるだろうなあ…」

「はあ…は?」

「5」

ヤバい、この人はやると言ったら必ずやる人だ。殺ると書いてやると読む。

「4」

何か…何か先生の気を紛らわせられるものは無いか…!??

「3」

「失礼します」

あれは…戸塚!?? マイスweetエンジェル戸塚じゃないか! ああ やっぱり今日も可愛いぜとつかわしい。

「2」

だあああ! そうじゃない! 俺の気を紛らわさせてどうする!! いや 戸塚のせいではないが戸塚のせいだ。あとで戸塚成分を充分補給させてもらうからな、覚悟しとけ。

「1」

終わった…これは終わった…。甘んじて受けよう。教師の立場を利用した愛という名の暴力を…。愛してるぜ戸塚…戸塚?

「0…さあ比企谷、歯を食いしばれ」

「テニス部! テニス部に入ります!!」

俺は職員室に入ってきた戸塚をとっ捕まえ(シヤレではない) そう高々と宣言する。一方の平塚先生は固く握り締めた右の拳を下げることなくポカンと口を開け目を白黒させている。あつ、可愛い。

「は、八幡?」

「そうと決まれば早速練習だ! そうだろ戸塚? それじゃあ失礼します!!」

足早に職員室を去る俺とそれに引きずられる戸塚。あれ、これ端から見れば政略結婚させられる恋人を式場から連れ出す本物の彼氏の凶じゃない？つまり俺と戸塚はカップルだった…？

そんなアホなことを考えながらテニス部に所属を決めた俺だが、まさかこの決断が俺の人生を大きく動かすことになるなんてこの時は微塵も思っていなかったんだ。

彼の嘘は真実となる

職員室で見事愛の逃避行に成功した俺は未だ戸塚の腕を引っ張っていた。

「ねえ八幡！」

「おうなんだ」

「そろそろ…離してくれないかな？」

「え？」

振り返ると顔を赤らめた戸塚が手元の一点を見つめていた。思いの外近くにいた戸塚にドキツとしてしまう。落ち着け、戸塚は男だ：それでもこの可愛さは反則級だ：！一体なんなんだこの天使は。ん？手元？

「うおっ！悪い！」

慌てて戸塚の手を離す。もう少し握っていたかったが仕方がない、取り敢えず今日は手を洗うのは止めておこう。

「ううん、大丈夫。それよりさっきの話は本当？」

「さっきの話というと…」

「八幡がテニス部に入るって話!!」

あー、それな。平塚先生の暴力制裁を避けるためにもしかして咄嗟についた嘘。まさに口から出まかせである。戸塚と共に放課後を過ごせるという嬉しい特典付きではあるがやはり俺には運動部というのは向いていない。あれは…そう、汗とか涙とかそういったものが似合う奴らがやっていれば良いのだ。

「嬉しいなあ、僕テニス部の人やスクールの人と打つことがあってもクラスの友達と打ったことなんてないんだよね！この時期に急な入部で心配かもしれないけど大丈夫！そこは僕がちゃんとフォローしてあげるから!!」

「そのことなんだが…」

「入って…くれるよね？」

「勿論だとも」

しまった。戸塚七つ道具のうちの一つ、天使の涙目により俺の嘘は

一瞬で真実になってしまったじゃないか。もしかして俺は戸塚に「この壺、300万円するんだけど持つてるだけで幸運を呼び寄せることが出来るから持つていて損はないよ。買ってくれないかな?」と明らかに罠であったとしても何も疑わず買ってしまふのではないのだろうか。本当のところ? 馬鹿野郎、ダース単位で持つてこい。

「本当!? 嬉しいな、八幡と一緒にテニスが出来るだなんて!」

「そうか、お前が嬉しいなら俺も嬉しい」

「それじゃあ早速行こっか! 道具とかは気にしなくて良いから! 運動着は今日体育あったもんね、それで良いよ! まだ本入部とはいけないからまずは一週間仮入部だよ!」

「お、おう」

まさか戸塚の熱に押されるとは。こんなに喜んでくれて八幡非常に嬉しい。嬉しいのだが、俺にはやはり運動部は合わないだろう。何故学校で苦痛とも言える授業を受けた後に更に苦しむ必要がある? 戸塚には悪いが、ここはステルスヒッキーをうまく利用して仮入部期間の間に少しずつ影を薄めて…

「そのうち…一緒にペア組めるといいね!」

「お前に勝利を捧ぐ」

俺の入部が決まった。

彼は庭球における回転の基本を知る

「はい、みんな注目してください！新しく入ることになった比企谷八幡君です！」

「う、ウツス…比企谷でしゅ」

アカン、噛んだ。

あの後今度は俺が戸塚に引きずられるような形でテニスコートに連れてこられたのだが、着いて早速部員全員を集めて自己紹介という形となった。「なんだこいつ」と全員の目が語っているのは明らかだったし、初っ端から噛んでる姿を見て「キモっ」までランクアップしたかもしれない。いやむしろダウンか。

総武高校テニス部、決して強豪校とは言えず部員も大して多くはない。今ここに集まっているのは7人であり戸塚曰くこれで全員らしい。

「八幡にはこれからレベルを図るためにラリーをやってもらいます。体育で見た限りゆっくりだったら何とかかなるよね？」

「お、おう」

というのも昔からボッチだった俺は友達の壁君とラリー、つまり「壁打ち」というものを遊びで経験しておりテニス自体はそれなりに出来るつもりだ。なんなら、見よう見まねだがサーブだって打てる。

「はいこれ、部活のラケット。大事に扱ってね？」

「分かった」

お前からもらった物を無下に扱うわけがないだろう？そんなニヒルなセリフを心の中で呟きながらネットを挟んで戸塚とは逆側のコートに立つ。

「皆んなもよく見ててねー！気づいたことがあったら終わった後に行って欲しいからね！」

あいよーとまだらに声が上がリコートの側面に立つ部員たち。やめろ…そんなに俺を見るな…！緊張しちゃうだろ！！

「それじゃあいくよー！」

「うーい」

ぽーんと打たれた玉を目で追いながら着弾地点を予想する。これぐらいの高さなら結構跳ねるよな…？

「この辺か…？」

ぼそつと呟きながら球が来るであろう位置に構えラケットを引く。バウンドした球は予想通り俺の右手前にやってきた。それをラケットで叩き戸塚へと返す。…よし、なんとか戸塚のいる方へ返ったな。そんなラリーを続けること約一分。戸塚が中断したので俺も息をふうと吐き緊張を解いた。

「うん、ちゃんと打てるみたいだね。球との距離感もちゃんと掴めてるしなにより…」

「よくコースを狙えて返せてたじゃん」

戸塚ではない誰かが声を上げる。刈り上げられたツンツン頭の野郎の声だな。

「そうそうーちゃんと僕の所に返ってきてたね！」

うんうんと腕を組みながら頷く戸塚。え、何この子部長モードだとかんな可愛くなるの。それをこれから毎日拝めるのか…テニス部最高！

「強いて言えばドライブだな」

また違うやつ…あのチャラチャラしてそうなメガネ君か。今度はそいつが声を上げた。

「そうだね、当面の課題はそれだね」

「ドライブって…なんだ？」

「球の回転の種類のことだよ」

戸塚はそう言いながら球を三球ほど掴みコートに立つ。そして一発打ち込んだ。

「今のはフラット。無回転、もしくはそれに近い球のことだね。これは回転が無い分空気抵抗が少ないから球の速度が早くなるんだ。但しネットギリギリを通さないといけないから入れるのが難しい」

そう言ってもう一球コートに打ち込んだ。ん？今のは山なりなコースだったな。

「今のがドライブ。縦回転…上から下に掛かる回転だよ。これを掛け

ることによって球が安定するんだ。テニスでは主にこの回転を使います」

そして最後に…と言って打ち込んだ球はスピードはそこそこに、ふわりと浮き上がるような球だった。

「これがスライス、八幡が使っていたのはこれだね。下から上にかかる回転だよ。野球のストレートをイメージして貰えばいいかな。八幡はラケットの面を上に向けて下からすくい上げるように打ったからこの回転がかかってたんだね」

なるほど、フラットやスライスはともかくドライブについては一人では分からなかったかもしれない。テニスとは回転一つとっても奥が深いものなんだな。

「テニスでは主にこの三種類の回転を使ってラリーをするよ。そこで八幡にはまずドライブを覚えてもらいます」

「おう、任せろ」

「僕はまだ職員室に用事があるから…八木君！八幡の練習見てあげて！」

「オツケー！」

え、戸塚じゃないの…？ショックを受ける俺の後ろで爽やかに答える八木君。振り返ると…

「おう、みっちりやってくからな。よろしくな！」

刈り上げ爽やかイケメン、長身の八木君が手を俺に差しのぼしていった。

「う、ウス…ドウモツス…」

めちやくちやキョどる俺。あれ？詰んでね？

彼にとって仲間とは何か考える

「そうそう、下から擦り上げるような感じでき」

「こ、ことうか？」

「おおおおい感じやん！」

苦手な部類トップ3には入るであろう、刈り上げ爽やかイケメンこと八木君の指導のもと俺はドライブの練習に勤しんでいた。内容としてはお互いネットギリギリに立ち八木くんが上からボールを落とす、それを俺が下から擦り上げるように球を打つというものである。「あと注意するなら実際打つときはこの下から擦り上げる動作にプラスして球を前に押しだす、という作業が付いてくることぐらいかな。下から擦り上げるだけじゃ球は飛ばないからな！とまあ、こんな感じだけ大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「そこは『一番良いのを頼む』だろ？」

こいつ…出来る…！

そう、この八木君練習していて気づいたのだがとってもいい奴。俺のようなボッチにも友達のように接し、会話の引き出しも非常に多い。リア充御用達の美味しいスイーツから今週発売のラノベ新刊までなんでもござれだ。しかし、だからこそ俺は疑ってしまおう。この会話に何か意図はあるのか。俺と会話を合わせるだけ合わせて心の中で指をさし笑っているのではないか。言葉の裏を探ってしまう。

「なあ比企谷…ありがとな」

は？藪から棒にお礼とな？急なお礼に戸惑う俺なんて御構い無しに彼は言葉が続ける。目を伏せ、ポツリポツリと呟く。

「正直この部活最近までだれてたんだ。集まる奴らは斑ら、来ても喋るかゲームばかりでテニスなんてこれっぽっちもしない。そんな中戸塚は違った。一人でも練習を続けてたんだ。でもあいつ…あんな性格だからさ、俺たちを注意できなかつたんだ」

あははと乾いた笑いを浮かべる彼は何処となく修学旅行で見た葉山を連想させた。どっちつかずで、自分を偽り続けた葉山に。

「だけど、お前が…お前たち奉仕部が戸塚を変えてくれた。あいつ、俺らに直接『ゲームばかりやるなら出て行ってよ!』って言うてきたんだぜ? いや俺らもビックリ、ポカーンよ。そんなおもむろに一人で練習始めるもんだから俺らもしようがなーく混ざるんだけどその時気づいたよ、俺らと戸塚の間に大きな差が出来上がったことに。そこから皆んな必死だったわ、差を埋めるために死に物狂いで練習練習」

気づけば元の爽やかイケメン八木君に戻っていた。あくまで俺らはきっかけを与えただけであり、その先を良くも悪くもするのは自己次第。戸塚はそのきっかけを上手く利用し自己改革に成功したというわけか。ふとコートを見渡せば練習に汗水を垂らす部員たち。己の行いを反省し、次へと移せる彼らは戸塚にとって『良い』仲間なのであろう。

「貴方のやり方、嫌いだわ」

「人の気持ちもって考えてよ!」

急に彼女たちの声が浮かんた。俺にとってあの二人は仲間だったのだからか。

いや。

俺はあの二人の仲間になれていたのか…?

「奉仕部については戸塚から聞いたんだよ。自分のことを変えてくれたってな、凄い感謝してたぞ。だから、俺はお前がこのテニス部に入ってくれることを嬉しく思うし歓迎する」

最高の笑顔で、まっすぐ俺を見て、手を差し伸べる。

「ようこそ、テニス部へ」

「ああ…よろしく頼む」

その手を握ることは出来なかった。

比企谷八幡は自分で居場所を壊し続ける

19時頃に練習は終わり、俺たちは各自帰路に着いた。戸塚と明日ラケットと靴を見に行くことになったのは俺たち二人だけの秘密だ。「明日は休みだから、一緒に見に行こうね！」だと。これはデートですよね？そう受け取って構わないですよね？

「たでーまー」

「おつかえりーお兄ちゃん！…つてあれ？なんか疲れてる？」

「いやすまん、今日は運動したからな…先風呂入るわ」

帰るなりまっすぐ風呂場へと向かい洗面所のドアを閉めると外から「お兄ちゃんが運動!?!」とかいう、とつても失礼な叫び声が聞こえた。小町さん、お兄ちゃんだつて運動ぐらいますよ。登校とか下校とか登校とか下校とか。

シャワーを浴び、一旦自分の部屋へと戻ろうと思っていたのだが思いの外疲れていたのか部屋につきベッドに座り込むなり泥のように眠ってしまうのであった。

いやあ、全く己の体力のなさには心底驚いてしまうぜ。いつもの時間に目を覚ましリビングへと降りるとすでに小町が朝食を用意してくれていたらしく、味噌汁の良い匂いが俺の鼻をくすぐる。

「おはよう」

「おはようゴミイちゃん」

おお、朝からキツイ一発だ。身震いするほど低い声で答える小町の正面に座り朝食を取ろうとする。

「お兄ちゃん、小町に言うことあるよね？」

「あー、なんだ…その…スマンかった」

「はあ…もういいけど、なんでそんなに疲れてるの？新しい依頼？」

「いや、そうじゃなくてだな…」

「何、小町には言えないっての？」

「まあ、その、アレだ…テニス部に入った」

「…はあ!?!」

「…から小町さん、机を叩くんじゃありません。カマクラがめちや

くちやビビってんじやねえか。

「え、何それ…奉仕部は？」

「……」

「ねえ答えてよ」

「……」

「何か悩みがあるならば、聞いてあげるからほらほら言っちゃいなって」

「うるせえよ」

自分でも驚くほどの低い声が出る。そして、この話題はそんなにも触れてほしくないものだと気づく。この行為が八つ当たりだということも自分でも分かっているのに、俺の口と思考は動くことをやめない。

「黙れ、お前には関係ないことだ」

「ちよつと、なによそれ」

「当然のことを言っただけだが？」

「あつそ…もういいよ。小町、先行くから」

顔に影を落とし、乱暴にリビングのドアを閉める妹の背中を見ながら俺は激しく後悔した。こうやって差し出された手を蹴っ飛ばしては後悔するだけの人生、なんだ何も成長してないじゃないか。奉仕部に居場所をなくしたと思っていたが、その居場所を壊したのは俺自身だ。

「気づいたときにはもう遅い、か」

登校時間までまだ余裕がある、コーヒーを一杯でも飲んでいこう。

彼女らは決意し、彼はまた悩む

俺は今、部室の前にいる。

というのもまた平塚先生に呼び出されたからだ。一度は断ったが、「依頼人の話だけでも聞いてやってくれないか」とのことだったので「まあ、それだけなら…」と承諾してしまった。そして今、俺は猛烈に後悔している。

「それでさー、優美子が…」

「あらそうなの…」

入りにくい、非常に入りにくい。「どうせ30分で終わるだろ」と軽く見ていた俺を思いつき殴り飛ばしたい…！戸塚に「30分ほど遅れる」という旨のメールを送り一呼吸。腹をくくれ比企谷八幡！

「うっす」

「……」

返事なしかよ。由比ヶ浜に関してはアホみたいに口をポカンと開け、雪ノ下は俺を見るなり目を細め睨んできた。やめてくださいそんなに見ないでください、穴が開いちやうだろ。俺は二人の視線から逃げるべく、近くにあった椅子を引き寄せ深めに座りいつもの文庫本を取り出した。

「随分久しぶりじゃない」

「…そうだな」

「もう来ないと思ってたわ」

「ちよつとゆきのん…」

「俺もそのつもりだった」

「ならどうして…!」

ノックなしに開かれる扉、我らが顧問平塚先生の登場だ。ナイスタイミング。後ろに付いてきている女子生徒が今回の依頼者か。

「あ、いろはちゃん!」

「結衣先輩どうもです」

由比ヶ浜の知り合いか。となるとサッカー部とかそこらへんの関係か…?

その後の話によると、どうもこの一色いろはとかいう生徒はクラス
の女子達からあまり良く思われていないらしく勝手に生徒会長へ立
候補させられてしまったらしい。今回の依頼はその一色が生徒会長
にならなくて済むようにしたいとのことだった。

「なんだ、それなら簡単な方法が一つあるぞ」

「え？何ですか先輩！」

「応援演説で盛大にやらかす。そうすれば信任投票で不信任になり生
徒会長になる必要もなくなる。悪意の矛先はお前へと向かわない。
ハッピーエンドだ」

実際これぐらいしかないだろう。どうも立候補しているのは今の
所一色だけらしいし、そんな面倒な役割進んで受ける奴がどこにい
る。

「待ちなさい：その応援演説をするのは誰になるの：」

「まあ、俺しかいないだろうな」

「ふざけないで！」

目を見開き俺を思い切り睨みつけてくる彼女を、俺は冷え切った気
持ちで、腐った目で見つめ返した。

「あなたの一声で、みんなが動くとも思ってるの：？？そんなのただ
の思い上がりよ：それにそんなことをしたら：：また：」

そこから俯いてしまつて何を言っているか、どんな表情をしている
のか俺には分からなかった。

「私が立候補します」

「は？」

「そうすれば一色さんは生徒会長にならなくて済む、私なら生徒会の
仕事をこなす自身だつてあります」

おいおい待て待て、雪ノ下が立候補するだど？？なんでそんな話に
なつたんだ。あまりに飛躍しすぎだろ。

「ゆきのん！ゆきのんが生徒会長になったら奉仕部はどうなるの？無
くなつちやうよ！」

「大丈夫よ、由比ヶ浜さん。なんとか両立してみせるから。それに：」

「ううん、奉仕部は無くなつちやう」

由比ヶ浜の言葉には、何故か説得力があった。雪ノ下は基本なんでもできるが不器用な人間だ。一つのこと集中すると周りが見えなくなる、例えば自分の体調であっても。そのことが文化祭で証明されてしまったのだから。由比ヶ浜は奉仕部が無くなると思ったのだろう。「私も立候補する！私なら、ほらあまり期待されないと思うし！きつとうまく両立出来るよ！」

「由比ヶ浜さん……」

「だから、ゆきのんには負けない。奉仕部を無くさせなんかしない」

「……そう。なら今回は全員別行動ね」

雪ノ下は席を立ち、荷物をまとめ始める。バッグを肩にかけて扉を開ける寸前、彼女は俺らに対して背を向け口を開いた。

「比企谷君……貴方の好きにはさせないから」

その後、一色と平塚先生にまた後日連絡するとだけ伝え急いで戸塚の元へと向かった。今日は戸塚とデート……いや、ラケットと靴を見る日なのだ。集合場所である、駅の時計モニュメントには総武高の奇跡こと戸塚と……材木座？

「おい材木座、なぜお前がここにいる」

「それは貴様らが二人で買い物をするって聞いたからだ!!」

ビシィ！と音が聞こえてきそうなほどきれいに右の人差し指を俺に向けてきた。頭にきたのでその指を捻りあげることにした。

「痛い痛い痛い!!それにズルイではないか!!なぜ我を置いていく!!」

「お前テニス部じゃねえだろ」

むむ？とずれた眼鏡を指で直し、ワザとらしい声をあげ材木座は続けた。

「八幡、お主テニス部に入ったのか？奉仕部はどうしたのだ？」

「ああまあ少し……な」

なんて説明すれば良いのだろう。嘘告白をして気まづくなった？やり方を真っ向から否定された？

「まあまあその話はこれぐらいにして中に入ろうよ」

「おお、そうしようではないか！では行こうぞ！八幡よ！」
俺は一体、どうして奉仕部から逃げたのだろう。

「テニスラケットつて、沢山あるんだな…」

ここは千葉県内でも有数のテニスショップらしく、壁一面にテニスラケットが掛かっていた。ヨネックスやプリンスと聞いたことのあるメーカーから…ヘッド？あとあれはなんて読むの??バボラ？とかテニス特有…なんだろうか、まあとにかく沢山だ沢山。

「一体何を基準に選べばいいんだ？」

「うーん、僕もあんまり分かってないんだよねえ…」

あははじゃねえよ、頭掻きながら苦笑いするな可愛いすぎて理性保てなくなるるだろ。

「八幡は初めてだし、気に入ったので良いんじゃないかな」

「えっ、そんな適当で良いのか」

「まあ、最初の一本だしね」

そう言われると八幡困っちゃうなあ…。折角ならかつこいいやつが良いよな。おっ、なんかカッコよさげのがあるぞ。よしあの青と黒のやつならどうだ！

「三万…だと…!?」

「え？ああ…バボラね…」

え、なにその反応。怖いんですけど何かダメだった!?？教えて戸塚えもん!!

「ちよつと他に比べても高いよね、でもそのラケット使いやすいつて有名だし買って損はないと思うよ！」

そうなのか。うーん、たしかに高い。しかしピンとくるものなんて見回しても他に無いからなあ…。昔からボツチだった俺は貯金はそれなり貯まっていた。なのでこのラケットとシューズぐらいなら買えるのだが、それでも大きな買い物ということに違いはない。

「それを使ってテニスしてる八幡、きつとかつこいいね！」

「これ下さい」

やっぱこれだわ!!! 金なんて関係ねえ、ピンときたやつが一番!!! だよな戸塚!!!

「ガツト! の張りはいかがいたしますか?」

「えっと…戸塚、どうすれはいいんだ?」

「55でいいんじゃないかな」

「じゃあそれで」

「かしこまりました」

一方その頃材木座は「我もテニス、始めようかなあ」と呟いていたらしい。

比企谷八幡は背中を押され、また歩み始める。

無事ラケットとシューズを購入した俺らはサイズで軽く食事を済ませ解散となった。材木座がイカ墨。パスタを「漆黒に染まりし戯れ」ドリンクバーを「神の選択」などとぬかし厨二病を見事に露見させたため席を離すことになったが、俺は戸塚と二人で食べたのでそれはそれでよし。

そんなことより一番の問題は…

「帰りたくねえよなあ…」

小町だ。絶賛喧嘩中なのである。一応夕飯を食っていく旨をメールで伝えておいたが「分かった」とただ一言のみ帰ってきただけだ。今頃反抗期か、お兄ちゃん困っちゃうぞ。口では帰りたくないと言ってみるが、だからといってボツチの俺に他に行き着く場所などなく、気がつけば家の前に立っているわけで。仕方がない、覚悟を決めろ比企谷八幡。あれ、今日二度も覚悟決めてるな。俺ってそんなに修羅場くぐり抜けてきてるの？

「ただいま…」

「おかえり」

小町さんが玄関に立つてました。もうそれはそれは凄い迫力で。一体何人葬ってきたんだろうなあ、少なくとも俺はそのうちの一人だよなあなんてことを考えていると我が妹は重い口を開けた。

「それ、買ってきたの？」

「ああ…まあな」

「本当にテニス部に入っちゃうの…？奉仕部はどうするの…？」

「ああ、奉仕部な…」

「無くなるかもしれん」

俺は死刑宣告を伝える看守のように、ただ一言呟いた。その言葉は俺の心にも刺さる。おい比企谷八幡、お前はあの場所をみすみす無くさせていいのか？お前のたった一つの居場所だったんじゃないのか？

「嫌だよ…そんなの嫌！小町ね、雪乃さんがいて結衣さんがいてそし

てお兄ちゃんがいるあの場所が好きなの！あの場所にある総武高校に入りたいの!!」

小町の悲痛な叫び。刺さらない訳がない。俺だってそうだ。あの場所：紅茶の匂いが漂って雪ノ下は静かに文庫本に目を通し由比ヶ浜は雪ノ下に絡み俺はそれを横目に本に目を落とす。そんなあの場所、奉仕部が：

「好きだったんだ」

「え？」

雪ノ下ならあの一年生：一色を蹴落とし生徒会長になる事なんて朝飯前だろう。由比ヶ浜だってありえない話じゃないのかもしれない。そしてどちらかが生徒会長になれば奉仕部が崩壊するのは目に見えている。やはり、二人が生徒会長にならずに済むよう事を運ぶしかない。

「小町」

「…何？」

「相談がある」

「…大体の事情は分かりました」

俺が淹れたコーヒを啜りそう答える小町。全てを小町に伝えた。修学旅行前に貰った依頼のこと。海老名さんへの嘘告白のこと。テニス部に入った経緯。生徒会選挙のこと。そして奉仕部の存続を望んでいること。

「お兄ちゃんって、本当ゴミいちゃんだよね。なんでそんな大事なことを教えてくれないの？」

「すまん…」

小町は飲み終わったカップをテーブルに置くと、真剣な表情で切り出した。

「お兄ちゃんは奉仕部を無くしたくないんだよね？でもテニス部に入ってから逃げ続けた手前、正直にはなれないと」

「まあ…そうとも取れるな、うん」

「うわめんどくさっ」

そんなゴミを見るような目で兄を見ないで、悲しすぎてMAXコーヒーも喉を通らなくなっちゃうだろ。

「仕方ない……ここは小町が背中を押してあげよう」

小町が俺の背後に周り、肩に手を置き優しく諭すように言葉が続けた。小町、お前はいつだって……

「小町からの依頼、奉仕部を助けてあげて」

「妹からの依頼なら、断れないよな」

俺の味方だったんだな。

平塚静は彼らの前に立ち塞がる

あれから材木座、小町、小町が呼んだ川崎に手伝ってもらい二人を会長にしない方法を考えた。戸塚はテニス部の部長ということもあり、忙しかったのか参加できなかった。俺もテニス部の練習に参加しつつでの話し合いなので時間は限られたものであった。

「あの二人以外に会長を作るっていうのが話は早いよな」

「そうだね」

「うむ…しかし、あの二人に勝てる器などいるのか？」

超人雪ノ下とトップカーストに所属する由比ヶ浜に勝てる逸材などあまり聞いたことがない。というか、ボッチの俺らにはその手の噂は入ってこないのだ。一旦俺らは会長に適任であろうメンバーをあげることにした。

「こんなところか」

「おお！思ったよりも多いですね！これなら頼み込めば一人ぐらいは！！」

「だがな小町、この作戦には大きな穴が一つある」

「え？」

「俺ら全員ボッチだということだ、説得するどころか知らない奴に話しかけられない」

全員から「あ」という声が漏れた。おいおい気づかなかったのかよ、俺だけじゃなくてお前らのことでもあるんだからな？おい小町、哀れみの目でこの場を見渡すんじゃない。

「…この作戦は一度白紙に戻そう」

「はい…」

誰かを新しく会長に祭り上げる、それ以外であの二人の会長就任を阻止する方法。考えろ、きつと見落としがある筈だ。それこそ、もっと簡単な方法が…

「あ」

どうしたと言わんばかりに3人が顔を覗き込んでくる。二人の会長就任を無かったものにし新しい会長を作る必要のない方法、それは

…
「一色を会長にしよう」

あれから数日が経った。俺は現在奉仕部の部室で雪ノ下と由比ヶ浜に一色が会長をする旨を伝えている。一色が会長になる、つまり依頼自体取り下げれば二人が生徒会長になる必要も無くなるというわけでもそれも付け加えて説明した。

一色を生徒会長にするのは困難を極めた。まず本物の署名を集めることから始まり、俺自身は一色との直接対決をする羽目になったのだ。会長になるメリットと一年生という立場上デメリットも少ないことを伝える。一色が不安を唱えれば俺がその不安を解消するという応酬を繰り返し、やつと承認してくれた。

「そういうわけだ、これでお前らが会長になる必要も無くなった。違うか?」

「そう…ね」

「うん…すごいじゃんヒツキー」

これで俺は小町の依頼もクリアしたわけだ。良かった良かった、これにて大円団。
「だけど。」

「この違和感は何なんだ?」

「それじゃあ、私は平塚先生にその旨を伝えてくるわ」

「よろしくね、ゆきのん!」

「…比企谷君」

扉の前で立ち止まった雪ノ下はこの前とは打って変わって、柔和な表情を俺に向ける。

「貴方、今回は誰も傷つけずやってのけたのね。私の思いも伝わったかしら」

「そうだよヒツキー、約束守ってくれたんだね!」

「約束?」

「修学旅行の時言ったじゃん!こういうのもう無しねって」

ああ、約束ね。約束…

違和感は疑念へと変わり始めて。

「奉仕部の自覚もやつと芽生えてきたかしら。遅すぎじゃないかしらダメ企谷」

「ゆきのん言いすぎー」

疑念は確信へと変化し。

「認めたくないけど、今回は貴方の手柄ね。今の貴方なら戻って来てもいいのよ?」

「そうだよヒツキー戻って来なよ!」

やめろ…

「だって貴方は」

「だってヒツキーは」

やめてくれ…

「奉仕部の一部なんだから」

確信は、黒い感情へと変化する。

「勝手すぎやしないか」

「…え?」

「俺は今まで俺なりのやり方で依頼をこなしてきた。褒められたやり方じゃなかったかもしれないがな。お前らが出来なかったことをやってきたんだよ」

おい止まれよ、これ以上喋るな。

「気に入らないやり方を否定すると思えば、今度は戻ってこいだと? 笑わせんなよ」

「比企谷君…?」

「あーあ、俺は奉仕部の一員だと思ってたんだけどな。まさかお前ら…」

それを言うな。止まれって、やめてくれよ。俺は戻りたいんだよ!

「俺ことを奉仕部の道具だと思ってたなんてな」

「私は一部と言っただけで、それは勝手な解釈じゃ…」

「黙れよ」

言ってしまった。この場において最も残酷な一言を。

「俺は今やテニス部の一員だ。ここは辞めさせてもらう」

「ちよつと待つてよヒツキー！」

「じゃあな」

扉を閉める。扉越しに由比ヶ浜が肩を落とした気がしたが、俺にはもう分らない。

「ヒツキー……」

比企谷君を道具として扱っていた？そんな事ないわよ、私はただ比企谷君に戻って欲しかっただけで、あれは言葉の綾で……

「邪魔するぞ」

「平塚先生……」

「話は大体廊下で聞かせてもらった。比企谷も視界の狭い奴だな、反対側に居たとはいえ私に気がつかなかったからな」

はははと笑い、先ほどまで比企谷君が座っていた椅子に腰をかける。

「雪ノ下、お前らは何故比企谷をここに呼び戻したい？」

「それは……まだ彼の更正は終わってないので……」

「そうそう！ヒツキーボツチだし……」

「こう言っちゃあ何だがな、あいつはテニス部で上手くやっているらしい。つまり、私の依頼はほぼ完了したと言ってもいいだろう」

意外だった。まさか比企谷君が他人とコミュニケーションを取るだなんて……。私達以外と上手くやれているだなんて……

「もう一度聞こう。お前らは何故比企谷を呼び戻したいんだ？」

「それは……」

「すぐには答えは出ないか……」

答えられなかった。何となく、浮かんでくるものがあるのだけれどそれを言葉にして口にする事は出来なかった。

「そこを踏まえてだ……お前らに依頼者が来ている」

「え？」

「入ってくれ」

「失礼します」

「貴方は……」

やってしまった、小町がくれたチャンスを盛大に棒に振ってしまった。今思い返してもあれは俺が悪い。雪ノ下の言っていたことも、所謂言葉の綾ってやつだろう。時間が経てば経つほど罪悪感が重くのしかかる。

「…謝るか」

俺にしては随分前向きな考えであった。やはり、テニス部で運動することでも多少なりとも変わっているのか？

「おーい比企谷」

「悪い、遅くなった」

コートの入りに俺に気がついた八木君が声をかけてきた。あれから二週間ほど経ったが、俺は意外なことにテニス部で上手くやれていた。相変わらずキョドってばかりの俺にも、どいつもこいつもこく話しかけて来るもんだから気がつけば冗談の言い合える仲まで発展していたのだ。これが青春…？やだ、八幡リア充の仲間入りなの？

「こいつがお前に話があるってよ」

「はちまーん！」

この小太りシルエット、まさか…

「材木座？」

「勇気を出して来てみれば、八幡も戸塚氏もいないから我寂しかったぞー！」

「戸塚は？」

「職員室に用事だつてさ」

なるほど、部長は相変わらず忙しいんだな。俺に泣きつく材木座を引きうがし要件を聞く。

「材木座、何しに来た」

「我もテニス部に入りたいのだ！」

「はあ？」

「八幡最近楽しそうだし、ずっと戸塚氏と一緒にいて我寂しいのだから我もテニス部に入りたいのだく!!」

テニスがしたいんじゃないのかよ。とはいえ、こいつが勇気を出してテニス部の門を叩いたことは褒めてやりたい。人見知りが激しい分ここに来るのは勇気が必要だったろうし、何よりこの爽やかイケメン八木君に話しかけるのは寿命も縮まる思いだったろう。

「どうする？俺は入れてやりたいんだが…」

「八幡！」

「いいんじゃないか？来るもの拒まず、だぜ」

このイケメン野郎お…！白い歯を見せ親指を立てる彼は眩しすぎた。目眩がする…！

「まあ、そういうことだ。良かったな材木座」

「わ、我頑張るぞお〜！」

そんなこんなで材木座の入部が決まった。こいつ、こんななりでちゃんと動けるのか？八木君や他の部員に絡まれてキョドる材木座を見ていると不意にコートの入りに口から声がかかった。

「邪魔するぞ」

「平塚先生…？」

そこにいたのは平塚先生、それと何故か雪ノ下と由比ヶ浜まで。一体なぜ…？

「おお、比企谷か。丁度いい、お前に話があつたんだ」

「一体何すか？」

「お前、テニス部辞めろ」

瞬間、場の空気が凍る。

材木座をイジっていたやつらもイジるのをやめ、気がつけばテニス部全員が俺らの話に注目していた。

「どういうことすか…？」

「お前この二人に啖呵を切ったようじゃないか」

顎で後ろにいた彼女らをさす。さっきの話だろうか。それについてこの二人が怒っていると、そういうことだろうか。

「その話なら…」

「おっと、謝って済むと思うな。私はな、腹が立っているんだ。元々お前を入れたのは更生のためだと言ったよな？それが終わっていない

のに何勝手に辞めてるんだ。余計なことをするな、お前は奉仕部にいればそれでいい」

何を言ってるんだ…？俺の中で平塚先生が崩れていく。俺はこの人に憧れてたのか？俺が憧れた平塚先生はこんな人間だったのか？

「教師命令だ、テニス部を辞めこちらへ来い」

「勝手なのはそっちだろ！比企谷がやめる必要なんて」

「お前も逆らうのか？ならば、お前も教師権限で辞めさせてやろう」

血の気が引いた。まさか、俺以外の奴が巻き込まれるだなんて…！八木君は悔しそうに唇を噛み後ずさる。この時テニス部員全員が平塚先生の気迫に押されていた。俺でさえ、ここまで迫力のある平塚先生は見たことがない。

「まあ、チャンスをやらんわけでもない。比企谷、奉仕部と対決しろ」
「は？」

「お前の得意なテニスで勝負をつけてやると言っているんだ」

テニス対決だ…？頭が痛い、もうこの人が何を言っているのかさっぱり分からない。

「三対三の団体戦だ。どうだ？面白そうだろ？お前らが勝てばテニス部を続けてもいいぞ。奉仕部を辞めてもいい。ただし負けた場合、比企谷以外にも参加した生徒にテニス部を辞めてもらおう」

「そんな！」

「おいおい比企谷。何被害者ぶってるんだ、元はと言えば調子に乗り私を怒らせたお前が悪いんだぞ？それで、いないのか？比企谷と心中するやつは？」

振り返ると皆目を背け俯いていた。無理もない、俺だってそうする。彼らを責める義理は、俺には無い。

「僕がやります」

「ほお？戸塚か」

いつの間にかに戻ってきていた戸塚が手を挙げた。

「八幡は僕と一緒にテニスをしてくれるって言ってくれたんだ。そして僕を…テニス部を変えてくれたのだったって八幡なんだ！みすみす辞めさせるわけにいかない」

「そうかそうか、それで？他に一緒に比企谷とやってくれる奴はいないのか！おい!!」

まだ二対三だ、あと一人足りない。沈黙がテニス部を支配する中、俺は諦めていた。まだ俺は完全にテニス部員ではなかったのだからここで辞めても大して痛くは…

「わ、わ、我がいるぞおおおおお!!!」

「材木座!?!?」

「八幡をいじめる奴は！例え教師だろうと！雪ノ下嬢であろうと！由比ヶ浜嬢であろうと！ゆ、ゆ、ゆ、許さないんだからな!!!」

キョドリながらも、声を張り上げる材木座。声だけでなく足も震えていたがまっすぐ平塚先生を見上げていた。

「これで三人か…いいだろう。勝負は1ヶ月後だ。このコートで行う。お前らが負けたら私たちの言うことを何でも聞いてもらうからな。ま、精々思い出でも作っていてくれ」

そう言い残し平塚先生は去って行った。材木座は力が抜けたのか地面に座り込み、八木君は俺のところに来てきた。

「ごめん…!」

「ど、どうしたんだよ」

「あの時、お前を守ってやれば良かったのに…辞めさせるって聞いた時、俺、頭が、真っ白になって…!」

本当にいい奴だ。まだ入って二週間しか経たない俺の事を思ってくれている。それから口々に他の部員も謝ってきた。

「俺らは試合に出れないが、全力でお前をサポートする。お前を…お前らをみすみす辞めさせてたまるかよ!!!」

俺はテニス部だって辞めたくない。短い期間だったが俺の居場所になっていたことは変わりないのだ。残り一ヶ月、全力で食らいついてみせる。

それにしても…

「何故雪ノ下嬢も由比ヶ浜嬢も一言も話さなかったのだろうか」

「分からん、ついでに言えば平塚先生のこともだな」

いつの間にか復活した材木座が俺に問いかけてきたが、それは俺に

も分からないことである。彼女らはどちらかと言えばついて来させられた感じがあった。平塚先生、あなたは一体何を…？

「ところで材木座」

「なんだ八幡」

「お前、テニスの経験は？」

「自慢ではないが、我生まれて一度もスポーツ経験が無いのだ！」

頭が痛くなってきた…。

彼らは一つ、大きな舞台へと踏み出す。

あれからの話をする。

と言ってもそんな大層なものでもない。俺はどうも平塚先生やあの二人が俺を取り戻すためだけにここまで横暴になるとは思えない、テニス部員の皆にその旨とあまり噂にしないしてほしいということ、戸塚に広めてもらうよう頼んだ。人の口に戸は立てられないとは言ったもので多少の噂は覚悟していたが、文字通り全くその噂が流れることは無かった。千葉のテニス部員訓練されすぎだろ。

さて。

何か理由があるにせよだ、あまりに横暴すぎる。俺だけじゃなく、周りの奴らまで教師権限を振りかざし辞めさせるだなんてやりすぎだ。

比企谷八幡は激怒した。必ず、かの邪智傍若の独身を除かなければならぬと決意した。そんなこんなでテニスの練習をすることにする。少なくとも、勝てば辞める必要はないし企んでることを洗いざらい吐かせることができるからな。小さな、本当に小さな抵抗ではあるが平塚先生の授業は開始から終了まで全部寝てやった。顔を教卓に向けるほどの勇気は無かったので机に埋めていたが。平塚先生もそれを分かっていたのか、特に何も言っただけだった。由比ヶ浜ということ、明らかに意識して俺の事を無視していた。それにしてもあいつ、テニスできるんだろうか…。雪ノ下は顔を合わせていない。元々クラスが遠いというのもあったが、本当にまったく顔を合わせなくなつた。

テニスの方はというところ程度形にはなっていた。当初の課題であったドライブも打てるようになり、サーブも球威こそは無いがフラットとスライスは身に付けた。スピンサーブはまだ練習中である。驚いた事に材木座の方もそれなりに上手くやっている。周りの助力もあつてかメキメキと実力を伸ばしていた。あと、ミジンコ並みのコミュニケーションもアリ並には成長したのではないだろうか。俺が言えたこと

ではないが。

約束の一ヶ月後まで残り二週間を残したある日のことである。

「大会に出よう！」

戸塚がそんなことを言いだした。試合自体はテニス部で他の部員たちに相手してもらっていたのだが、戸塚曰く「いつもの相手とやっているプレースタイルが固まっちゃう。もっといろんな相手と試合して、自分の足りないところを探さなきゃ」とのことである。そんなこんなで今、俺らは千葉県某所の運動公園にいる。

「今日は張り切つていこうね、八幡！材木座君！」

「お、おう…そうだな…」

なぜこんなにも俺はグロッキーなのか、それは。

「は、はちまくん…人が…人が沢山おるぞ…」

「ああ…俺らの苦手なスポーツマンだ…」

コミュ障故である。

「何言ってるの！八幡も材木座君も、今や立派なスポーツマンでしょ！」

俺が…スポーツマン…だと…？

隣では材木座が悟ったような目で会場を見渡していた。マジでどうしたお前。

さて、今回俺らが参加している大会は所謂市民大会である。市民、とは名を売っているが実際のところは千葉県民なら参加費優遇、他の県なら少し割高で参加できるらしい。そしてこの大会、多くの千葉ジュニアの選手が参加する割と大手の大会らしい。もちろん、ここから関東や全国につながるわけではないが。腕試しの色が濃い大会だということだ。

「あつ、ドローが出てるよ！見に行こう!!」

本部に駆け寄る戸塚の背を追いかけ、俺らはドロー…つまるところ対戦表を確認しに行った。

「僕は…あ、あった。うわつ、この相手この前負けちゃったんだよねー。今日は勝たなきゃ」

戸塚の名前の隣には括弧でテニススクールの名前が書かれていた。

戸塚は現在テニススクールにも通っており、そこを通して応募したい。俺らもそのツテで応募してもらったが所属は総武高にしてもらった。

「材木座君は…これだね。うーん聞いたことないなあ。もしかしたら大人の人かもしれないね。八幡は？」

「俺はつと。お、あつたぞ。相手はな…。ああ岡田ってやつだ」

「岡田君!?もしかして所属はかがわTCになってない!?？」

急に戸塚が吠え出した。あまりの大声に俺も驚き身を少し引いてしまったが、その状態で戸塚の問いに答える。

「ああ、その通りだが…何かあつたのか？」

「彼はね…全国区の選手なんだよ…」

八幡、終了のお知らせ。

彼に「足りないもの」を見つげるために、強大な敵にも立ち上がる。

「岡田サーブスプレー！」

ついに始まってしまった…

戸塚の前情報曰く「ライジングフラットの使い手」だそうで、言ってしまうと全国的にも珍しい選手だそう。バウンドする球が上がりきる前に叩く”ライジング”とネット上スレスレを通す必要のある”フラット”を使いこなす岡田は大胆かつ繊細な技術を持ち合わせていると言っているのだろう。そんな相手に俺のテニスが通用するのか、否通用するはずがない。

だがしかし「自分の足りないところ」を探し出すのが戸塚からのお達しである。それなら俺に残された道は一つだけ。

「本気でやるしかない」

パン!

はい? えつ、今の何。あつ、サーブ?? あんな速度、八幡新幹線ぐらいしか見たことないよ?? 全国区になるとこの速さのサーブが普通になるの?

「15-0」

ここまでの相手だ、本気でやらなきゃ自分の悪いところが見える前に1セットなんて簡単に取られちゃう。あ、さっき言いたかったのはこれです。ラケットを握り直し構え正面から岡田を見つめ直す。

よく見ろ…よく見れば触るくらいなら出来るはずだ…!

ルーティンを終えた岡田がトスを上げる。一番高くまで上がったところを…叩く!

「くっ!」

届かないか! 球を見るだけじゃ俺の反応じゃ届かない! 今の俺には打ってから動くようじゃこの相手には到底届かない、そういうことか…? ならばどうする比企谷八幡。バクチでも打ってみるか? いや、それじゃあまりに無謀すぎる。何かあるはずだ。考えろ考えろ。

…そうだ身体の開き具合とラケットの振りを見るのはどうだろうか。そうだ、それである程度の範囲に絞ってみよう。

「30—0」

岡田はまた、空高くにトスを上げ…身体を大きく開きラケットを肩から振り上げる…スライスか？つまりコースは…

「ワイド！」

よし、何とか触った!!ボールは返ら…ないか…!

「アウト！」

「くそっ」

コースが分かってもまだ触るので精一杯だ。これだとサービスゲームは岡田の一方試合になるぞ。…しかし今の俺にはこれで精一杯だ。とにかくこれで返して何とかラリーに持っていくしかない。

「40—0」

今のでうまくいったんだ、この方法はきつと間違いじゃない。次もこれでやってみるか。

岡田はラケットの振りとほぼ同時に身体を開く。これはフラットだな。そして…

「ボデー！」

正面にきた球を回りこみラケットを伸ばす。触ってくれ…!

「ネット。ゲーム、ウオンバイ岡田。ゲームカウント1—0」

ストレートでキープかよ…。俺と岡田の間にはどれくらいの差があるのだろうか。それを考えるだけで冷や汗が止まらなかった。

「は、八幡は勝てるだろうか…」

「いや、流石に勝つのは無理なんじゃないかな…」

いくら成長の早い八幡でも、全国レベルの相手岡田君に勝てるわけがない。それだけに3本目でサーブにかすった時はひどく驚いた。どうやら八幡は僕が言った「足りないところ」について自分で補完しようとして張りつてみたいだね。

「あ、材木座君。そろそろ試合の時間じゃない？」

「む、もうそんな時間か。我も出向いてくるか!では戸塚氏、出陣して

くるぞー！」

「あ、いってらっしゃい。頑張つてね！」

それにしても八幡、本当に成長が早い。運動神経に恵まれなかったとはいえ、僕が一年間毎日練習してやっと満足に打てるようになったサーブでさえももの一ヶ月足らずで形にしたんだもんなあ。そのうちに本当に岡田君とまともにやりあつたりして。

…そういう意味じゃ材木座君も恐ろしいな。

休憩時間、俺は身体を休ませつつ頭はフルに回転させていた。まだ岡田の真骨頂、ライジングフラットを見ていないのにこのザマだ。基本のレベルに天と地の差があるということなのだろう。今のゲームはリターンゲームだったから相手が全国レベルというのも踏まえて一方的だったのはまあ、良しとしよう。次は俺のサービスゲームだ。一方的にやらせてたまるか。

「タイム」

タオルを置き立ち上がる。よし、やってやるか。

「……まだ俺のベストではない。見た感じ相手は初めて間もない初心者か？そんな奴にサーブを触られたのか……。本調子を決勝にあわせるとしてここでは20%、いや最悪の事態を考え30%ぐらいの……」

ええ！ええ！何！何だこいつブツブツ何か呟いてますよ!!!

こええー、全国こええー。あ、俺も目腐ってるし対して変わらないか。

「…よし」

まずは俺のサーブを入れることから考えなくては。コースはどうする？球種は？…まずはライジングフラットを見てみたい。ここは…

「…っふんー！」

まずはボディに渾身のフラット。よし、入ったな。しかしそれを難なく返す岡田。…ライジング、もちろんフラットで。

「くっっ！」

球が早いのは勿論だが、タイミングが掴みづらい！返ってきた球を

触ることしかできない俺の返球はフラフラと上がりこれを…逆ク
ロスに打ち込まれる。

…まあ、予想はしていたがこれはキープも厳しいんじゃないか？そ
もそも1ゲームでも取れば万々歳だろ、これ。

「0—15」

しかし当初の「足りないもの」を見つけないまでは帰れない。さて、次
のサーブは何処に何を打とうか。俺はまた頭をフル回転させるので
あった。